

アンナ・カレニナ (1935)

ANNA KARENINA

メディア 映画

ジャンル ドラマ ロマン스 文芸

製作国 アメリカ

色彩 B&W

時間 95分

初公開日 1936/04

公開情報 劇場公開

【解説】

トルストイの、帝政ロシアが舞台の有名悲恋小説の映画化。開巻、山盛りのキャビアが画面いっぱい
に捉えられ、セルズニックの豪華趣味にほくそ笑んでしまう。その後、前菜じゃ物足りない長テーブル
に埋め尽くされたご馳走をトラックバックで写し、またフムフム。そして主人公アンナの情人となる
ヴロンスキー伯たちの勇壮な飲みっぷりの儀式が面白おかしく描写され、後に展開されるメロドラマの
食前酒としては申し分ない。が、出会いのモスクワでの舞踏会と、家族のもとに帰る彼女を汽車に追う
伯爵（ミニチュアの雪景に上がる朝日を二人、別々に想い入れたっぷりに見つめる場面が綺麗）、そして、
運命を予感する停車場での雑役夫の事故ーといった辺りまでは割と快調でも、肝心のペテルブル
グでの人目を忍んだ逢瀬のつき重ねに情感が籠もらず、そのため、夫は冷酷だが、何も一人息子を捨て
てまで情人の元へ走らなくともと思わせる弱味が出る。ガルボはどこか超然として、捧げる愛、尽くす
愛というものが似つかわしくない。ただ、その母性の発揮は興味深く、名子役バーソロミュー相手の場
面は快く酔える。結局、ヴロンスキーは“トルコセルビア戦争”に出征し、彼女を捨てる。そして、
悲劇的な鉄道自殺の結末となるのだが、ガルボの御用監督ブラウンは、全体に禁欲的でもない作品なの
にこの泣かせ所をごく淡々と処理した感じで、観る方は涙を絞ろうにも鼻元で引っかかる感じでスッキ
リしない。マーチの伯爵将校は軍帽の被り方も艶っぽく、最初はいい感じなのだが、ちょっと無理して
色悪ぶった所が段々鼻につき始める。見るべきものはC・ギボンズのセットで、屋敷や庭園、停車場と、
いずれの造型も素晴らしい。

【クレジット】

監督	クラレンス・ブラウン	Clarence Brown
製作	デヴィッド・O・セルズニック	David O. Selznick
原作	L・N・トルストイ	L.N. Tolstoy
脚本	クレメンス・ダン	
	サルカ・ヴィアテル	Salka Viertel
	S・N・バーマン	S.N. Behrman
撮影	ウィリアム・H・ダニエルズ	William H. Daniels
音楽	ハーバート・ストサート	Herbert Stothart
出演	グレタ・ガルボ	Greta Garbo
	フレドリック・マーチ	Fredric March
	ベイジル・ラスボーン	Basil Rathbone
	フレディ・バーソロミュー	Freddie Bartholomew
	モーリン・オサリヴァン	Maureen O'Sullivan
	メイ・ロブソン	May Robson
	レジナルド・オーウェン	Reginald Owen

